

## 06・秘密の関係になる

『05・八月二十八日、夜』から三日後の九月一日。今日から二学期が始まる。

主人公、校舎へ向かうため、学校へ続く道をぼんやり歩いている。思い出すのは、夏休みクラウディアと一緒に過ごした事ばかり。

一緒に夜のプールで過ごしたあの日以来、二人は隙を見つけてはこっそり会った。外に出る事はなく、すべて学校で会っただけだった。

それでもとても幸せで、毎日があっという間に過ぎていった。

二人はますます親しくなり、特に夏休みの終わりごろは、まるで恋人のように距離が近かった気がする。……あくまで主人公の主観だが。

それに、堂々としていたのがよかったのか、特に誰かに何か言われる事もなかった。それどころか、クラウディアの家庭の事情を知る教師には、主人公がクラウディアを心配して、熱心に世話を焼いているように見えたらしい。

若い女性教師が、夏休みも家に戻りたがらない女子生徒に、何かと声とかけて、一緒に

過ぐす。

生徒側も、特に不快ではなさそうである。

確かに、これは『よい光景』と判断されがちなものだろう。

主人公だって、自分たちが他人なら、きつと似たような感想を抱いたはずだ。

だけど、『先生は熱心なよい先生ですね』と言われた時は、申し訳なくて泣きたくなった。誰も主人公の感情を疑わない。クラウディアさえ。

だけど自分は……そろそろ精神的に限界かもしれない。

心が弱すぎると笑ってほしい。

あまりにも早いが、すでに罪悪感で、ばつきり折れそうだ。

自分はちよつと普通じゃないくらいクラウディアの事を考えているのに、考えれば考えるほど、彼女を傷つける事をしてしまう。

ああ、もう嫌だもうダメだ。こんな自分いない方がいいんじゃないか絶対そうだ。

学校行きたくないです。行きたくないも何も住んでるけど。

勉強したくないです。するじゃなくて教える方だけど。

ていうか今日は始業式の後の実力テストの試験監督だから、教える事すらないけど！

とにかく嫌です。誰かお願い。わたしに『今日は休んでいいよ』って言って！  
……と思うくらい、思いつめている。

などと考えていると、反対側の学生寮側の道から、クラウディアがやってくる。

SE1 .. 外の環境音

【頭から流す】

【0―5秒ほどまで流してからSE2】

SE2 .. 主人公の足音

【頭から流す】

【0―5秒ほどまで流してからSE3】

SE3 .. クラウディアが小走りで歩いてくる音

【頭から流す】

【だんだん近づいてくる】

【0―3秒ほどまで流してからSE3】

【とにかく嬉しい】

先生♥」

〈主人公〉

「あ……」

対するクラウドディア、あれから色々考えたが、先日の件については、何も言わない、何も見なかった事にと決めた。

もし、主人公を問い詰めて、無理やりあの件について暴けば、クラウドディアは主人公の弱みを握る事ができるだろう。そう、えっちな漫画みたいだね。

だが、自分の欲望のためだけに、人の性生活というデリケートな問題を暴くのは、いかななものか。

もちろん、世の中には暴かれる事を望む人もいるし、もしかすると主人公もそうかもしれない。そんなえっちな漫画、いっぱいあるしね。導入の定番ですよ。

でも、自分はしたくない。主人公が暴かれない系の変態だと確定していない以上、主人公の名誉が傷つく可能性のある事はしたくない。

そういうご褒美の配布業務は、漫画に限らず、アダルトコンテンツ全般のキャラクターに任せます……。さようなら。定番の導入。私はその道を選ばない。と決める。

そして。手段を選ばない行動は、結局メンタルの弱い私にはできませんでした。確かにそうすれば先生は私のものになったかもしれないけど、それでもしたくないの。先生が申し訳なさそうにしゅんとしてる顔だけは見たくないから。はあーそれでも我ながら実に勇気がない。己の弱さが恨めしい。でもいいんです。先生の名誉の方が大事だし。『負けヒロイン』って言葉は恋愛を勝ち負けだけで判断しているようで好きじゃないけど、そう呼ばれる事になっても受け入れるって決めたんです。……あー受け入れはしたけどやっぱ負けたくないな？ ていうか、ベストを尽くさない限りは負けヒロインとすら名乗れくない？ 単なる棄権、敵前逃亡ですよねそれ。なぜベストを尽くさないのか？ そう言われちゃう事だけはしたくないっていうか。だったら私は……。もうちよつと露骨にアピールする。と思う。

「好意をまったく隠さない」

おはようございます。朝からお会いできるなんて嬉しいです♥  
今日から二学期ですね」

〈主人公〉

「おはよう……デイデイ……今日はいい天気だね」

「心配そうに」

……先生？」

しかし、クラウディア、主人公の様子が明らかにおかしい事に気づく。

『先生、顔色やばい。会話も噛み合っていないし……』と思う。

バスの一件の時も相当ひどい顔色だったが、今はもつと真っ青だ。

漫画的な表現をすれば、今、主人公の目の中には、大きな渦がぐるぐる、ぐるぐると巻いている。

「真剣に」

あの。どうなされました。顔色が悪いですよ」

〈主人公〉

「ええー？ そんな事ないよお。

あれえ。前にもデイデイにこんな事言われちゃったよね。わたし」

「真剣に」

あの時よりひどいです。

何か、お困りの事でもあるんじゃないやありませんか。

すぐに保健室に行きましょう。

お付き合います」

クラウディア、うっかり口が滑るが、慌てて軌道修正する。

『お困りの事でもあるんじゃないやありませんか』なんて、いかにも何か知っているような発言だ。

自分が『主人公の悩み』を察しているのはまずい。知らないふりをしなくては。

〈主人公〉

「大丈夫だよお。今日は試験監督だけだし、へーき……へー……あっ……！」

「あっ！」

主人公、手に持っていた荷物を派手に落とす。

全然『へーきへーき』ではない！　ここがプールならまた落ちている！

SE 4 .. 主人公が持ち物を派手に落とす音

【頭から流す】

【0―3秒ほどまで流してSE 5】

SE 5 .. クラウディアが駆け寄る音

【頭から流す】

【0―4秒ほどまで流してSE 6】

SE 6 .. クラウディアが落ちたものを拾う音

【SE 4と同じ音】

【途中から流す】

【4―7秒ほどまで流してSE 5】

クラウディア『だめだこれは』と判断する。

主人公の手を半ば無理やりとると、落としたものをさっさと拾い上げて、保健室に連れて行く事を決意する。

【きっぱりと】



ダメです。荷物下さい。……行きましょう！」

それから『ああ、これも二回目だ。なんか私たち、いつも似たような展開を繰り返してる。これはこれで、定番の導入ってやつなのかも……』と思う。

一度フェードアウトする。

十数分後。

主人公とクラウドディア、教師寮の主人公の部屋に向かっている。

あの後保健室に主人公を連れて行ったところ、主人公には熱がある事が判明した。

主人公は学校を休む事になり、クラウドディアはそれを送っていく決意をした。

だが、保健医は主人公が一人で寮に戻るのだと勘違いしている。

もちろん、クラウドディアはこれをまったく否定しなかった。

勘違いしたままでいてもらう事にしたのである。あくどい。

一方、主人公は『あれ、おかしいな。なんでデイデイと一緒になんだろう……？』と思っているが、二人でいられて嬉しいので、気づかないふりをしている。

主人公、サボりはサボりでも、一年前のプールの日とは全然違う。

自分が一緒にいたいからデイデイをサボらせるなんて、ああ、わたしはなんて悪い先生なんだろう……。と思う。

……そう思うと、ますます目の前がくらくらしてきた。

対するクラウドディアは『もはや『教師寮ってこんな風になってるんですね。初めて入りました♥』なんて演技してる場合でもないな。とにかく早く先生を休ませなきゃ……。』と思っている。

主人公から寮内の説明を受けるまでもなく、主人公の部屋へ、迷う事なく進んでいく。

主人公はこれを見て『あれ、なんか妙だな』と思うが、その違和感の原因はわからない。ぼんやりした頭のまま、クラウドディアに手を引かれてついていく。

SE7 .. 主人公とクラウドディアが寮の廊下を歩く音

【頭から流す】

【0ー7秒ほどまで流してセリフ】

「先生。さあ、着きましたよ。鍵お借りしますね」

SE8 .. クラウディアが主人公の部屋の鍵を開錠し、ドアを開ける音  
【頭から最後まで流す】

SE9 .. クラウディアと主人公の部屋の中へ入る足音  
【頭から流す】  
【0ー7秒ほどまで流してSE10】

SE10 .. 主人公がベッドに座る音  
【頭から流す】  
【0ー5秒ほどまで流してSE11】

SE11 .. クラウディアがベッド脇の机の椅子に座る音  
【頭から流す】  
【0ー6秒ほどまで流して、少し間をあけてからセリフ】

〈主人公〉

「デイデイ……ありがとう……」

「【優しく】

とんでもないです。

【ちょっとだけ怒って】

やっぱりお熱があったんじゃありませんか。

保健の先生の許可もいただきましたし、今日はこのままお休みになって下さいね。  
さあ、横になって」

SE12 .. 主人公がベッドに横になる音

【頭から流す】

【0ー5秒ほどまで流して、少し間をあけてからセリフ】

〈主人公〉

「……ところでデイデイ、始業式は？」

「【ケロっとしている】

あは。さぼっちゃいました。

だって、先生の方が大事ですし。

何もおかしな事はしてないんですから、堂々としていればいいんです。  
二時間目からは出ますから。ご安心下さい」

〈主人公〉

「そっか……」

主人公、クラウドディアの『何もおかしな事はしていない』という言葉が突き刺さる。  
主人公としては、十分におかしな事だからである。

主人公は今すぐクラウドディアを注意して、始業式に行くようにするべきなのに、それができない。一緒にいたくて、頭が回らないふりをしているからである。  
申し訳なくて涙が出てくるが、そこでクラウドディアが話し始める。

しばらく間。

【優しく】

あのね、先生。初めてお話した日の事、覚えていますか？」

〈主人公〉

「？ もちろん」

「プール授業から逃げようとしてる私に、先生は『共犯になろう』って言うてくれましたよね。

悪い事をしたのは私だけなのに。

先生はそんな私をかばって、一緒に嘘をついてくれました。

【少し間をあけてから】

嬉しかった……。

【声が明るくなる】

だから今日は勝手にお返しがしたかったんです。呼ばれてなくてもついてきちゃった。だって、体調悪い時にお一人でいるのって、辛いですよね？  
もう少しだけここにいさせて下さい」

主人公、いよいよ涙が出てくる。

クラウドディアにこれを見られないように、思わず顔をそむけてしまう。

SE13 .. 主人公がベッドの上で動く音

【SE12と同じ音】

【途中から流す】

【10ー14秒ほどまで流して、少し間をあけてからセリフ】

〈主人公〉

「ディディは優しいね……」

【得意げに】

ふふ。だって、私は先生の生徒ですから♡」

だが、クラウドディアの言葉が、主人公のメンタルをいよいよ砕く。

『ディディはわたしをこんなに信頼して、尊敬してくれてるのに、わたしは、わたしは……なんてダメな先生なんだああ』と、ついに正常な思考が崩壊する。

絶対に隠しておかなければと思っていた事を、話し始めてしまう。

〈主人公〉

「……そっか。でも、もし」

「え？」

一方クラウディア、主人公の顔が曇ったので、不安になる。

『え？ 絶対ウケると思った事言ったのにどうして？ 先生の生徒だからいい子って理屈ダメ？ 事実だが本心ではないっていう、すごい身を削るタイプの嘘をついたのに。私が先生の事単純に先生だと思ってる訳ないでしょ。いつだって狙っていますよ』と思っている。

〈主人公〉

「わたしが……」

「【優しく。だが、話が見えず内心混乱している】

うん？ なんででしょうか？」

〈主人公〉

「デイデイの事、生徒だとは思えないって言ったら、どうする？」



「優しく」

……先生。それは、どういう意味ですか？」

クラウディア、思わず期待するが、即座に『いやまだ早い』と己を落ち着かせる。ここで、思っていたのと全然違う事を言われたら、自分はものすごく傷つく。

そうなれば、冷静でいらなくなり、口が滑る恐れがある。

たとえどんなにうつかりしても、例の件について話してはいけない。

ここまで憔悴している主人公に追い打ちをかけてはならない。警戒しなくては……。だが、次の瞬間、クラウディアの正常な思考も大幅に失われた。

〈主人公〉

「急にこんな事を言ってごめんね。聞いてくれるだけでいいの。

わたし……あなたが好きです。

今も、本当は『始業式に戻りなさい』って言わなきゃいけないのに、できない……。まだここにいてほしいって思っちゃった。

ごめんね。こんな事を言って。困るよね」

「息づかいだけで驚きを表現する」

！」

クラウドディア、主人公の言葉が信じられず、一瞬フリーズする。  
予想だにしていない展開である。

だが正直、ここで勇気を出すのはまだちよつと怖い。

これが現実か確かめるために、正直なところ、主人公にはもう一回はつきり『好き』と言ってほしい。

そうしたら、私、思いっきり行けるのに……。と思う。

だが、すぐに気づく。今の主人公はこの調子だ。

今『好きってもう一回言ってもらおう作戦』はダメだ。

クラウドディアは、決め手に欠けているまま行くしかない。

主人公の言葉には頼れない。『今すぐ決める……』と、己を奮い立てる。

たとえ今、主人公は今頭がおかしくなっていて、両想いらしいのは、自分の完全な勘違いでも構わない。

今が気持ちを伝える、絶好のチャンスだ！

「優しくきつぱりと」

……いいえ。困ってなんかいません。困る訳、ないじゃありませんか。

「かわいくすねる」

先生だって、とっくにご存知のくせに。

「少し間をあけてから」

私も、先生の事が大好きです。

初めて声をかけてくれたあの日から、ずっと。

先生は優しいから。

もう、自分でもどうしたらいいかわからないくらい好きになっちゃってるんですよ。

『知ってるくせに♡』という感じで

ご存知でしょう？

「すごく優しく」

だから、何も心配しないで下さい。私はここにいます」

〈主人公〉

「デイデイ……！」

SE14 .. 主人公がクラウドディアに抱きつく音

【頭から最後まで流す】

主人公、クラウドディアに抱きつく。

クラウドディア、いよいよどっちが年上なのかわからなくて来たが、これこそが自分の望んだ事なのだと気づく。

自分は以前主人公に『困っている時に、年上とか年下とか、先生とか生徒とかはない。助けられる人が助けるのが当然だ』と言った。

今回、それができたのかもしれないと思うと、とても嬉しい。  
主人公を優しく抱きしめて、その背中を撫でる。

SE15 .. クラウドディアが主人公の背中を撫でる音

【頭から最後まで流す】

【すごく優しく】

ああ、泣かないで。先生。

私たち、同じ気持ちなんです。私、今、とても幸せです」

……あ、そうだ、悩み。まずいまずい。

クラウディア、主人公と抱き合つて幸せに浸りかけていたが、ここでハッ！と気づく。問題はまだ解決していなかった。

〈主人公〉

「ありがとう。でもね。わたし、デイデイにこんな事言ってもらう資格ないの。わたし……」

クラウディア、身構える。

『ああ、これ、先生自爆するつもりだ。良心の呵責に耐えきれなくなって、例の件まで全部しゃべっちゃうつもりだ。……あれって、さすがの私でも、事前に知ってなかったらちよつと引くやつなのに、このタイミングで言っちゃうつもり？ 先生それはダメ！ そんな事したら先生のメンタルが壊れちゃう。はい止めますよ』と思う。

【すごく優しく】

大丈夫ですよ。それは、言わなくていいです。

【少し間をあけてから】

というか……私、本当は知ってるんです。先生が体調を崩された理由。とてもお悩みになっている事があるからですよね？

【少し間をあげてから】

ごめんなさい。私、ここに來たの初めてじゃないんです。

何かおかしいと思いませんでしたか？

なんで私は、さっきから『先生には困り事がある』という前提で話しているんでしょう。それから、どうして迷わず教師寮の先生の部屋まで來られたんでしょうね？」

クラウドディア、先ほどのまでの自分の行動が、結果的には伏線になったな、と思う。これなら、主人公も納得してくれるはずだ。

とうとう、何かを察した表情……具体的にはさらに青ざめた表情になっている。

〈主人公〉

「えつと……？」

「ええ、ご想像の通りです。二十八日だったかな。

ここに夜、一人で來たんです。先生の忘れ物を届けに」

クラウドディア『これだと二十八日に一回だけ忍び込んだみたいな言い方だな。本当はあと三回来てます。つまり毎日来てたんです。先生最後まで気づかなかったけど。先生の部屋って、すぐ近くにある室外機の音がめちやくちやうるさいんですよね。先生はこれが原因で、外の音がわからなくなっていたみたいです』  
……と思うが、これは言わない。

### 〈主人公〉

「……今ね、オチが全員死亡の怪談を、知っていて聞いている気分だよ。つまりわたしという主人公の死は確定してるって意味だよ。その日の夜なら、わたし、ずっとここにいた。なのに」

クラウドディア、内心すっかり呆れているが満更でもない。

『……だったら、こっちはギャグの説明をするみたいな恥ずかしきなんですけど？  
ていうか、これ最後まで言う必要がある？ 先生はそういうのが好きな変態なの？  
私の気遣い、めっちゃ水泡なんですけど。  
あんまりだわ。付き合うけど！』と思う。

「はい。お会いできませんでした。」

だって、先生はお取込み中でしたから」

〈主人公〉

「一応確認すると。偶然お手洗いやお風呂に行っていたという可能性は……？」

「※マークまで、内心呆れつつも、すごく優しく」

いいえ。先生は部屋の中にいらっしやいましたよ。

私、とても近くまで来ていたのに、先生は気づかなかったんです。

先生、ほとんど人のいない寮だからって油断しすぎです。

【ひととき優しく】

ダメですよ。あんな声出しちゃ。

……あの。ここまで言えば伝わりますよね？」 ※

〈主人公〉

「……………ごめんなさい……………」

【普通に心配している】

はい。見つけたのが私だったからいいものの。気を付けて下さいね」



〈主人公〉

「……はい」

しばし沈黙。

主人公、恥ずかしさで頭が真っ白になる。

だが、この件の被害者であるはずのクラウドディアは、あまりにもこれまで通りである。なのでつい、普通に返事をしてしまう。

そのまま沈黙が訪れるが、やがて何かがおかしいぞ、と気づき、質問する。

〈主人公〉

「……ディアディ、怒ってないの？ わたしの事、嫌いにならないの？」

対するクラウドディア『あ、来ましたね』と思う。

今回の件でわかった事だが、主人公は割と『言わせたいタイプ』らしい。だが、今回の件に関しては、自分にも問題がある。

なので、積極的に『そんな事ないよー！』と言わせていただくと思う。

「これっぽっちも怒ってない」

怒る？ まあ、心配にはなりましたが。大好きに決まってるじゃありませんか。

……それどころか、すごく嬉しかったんですよ。

【だんだん楽しくなってくるが優しく】

だって。私の名前、呼んでましたよね。それも一度じゃない。

【声は優しいが『まあ、少しくらい意地悪してもいいか……』と思っている】

先生は、私の名前を呼びながら。このお部屋で……」

〈主人公〉

「わー！」

「あははっ♡」

〈主人公〉

「ひどい！ デイデイ！ ひどいよ！ そこまで言わなくても！」

「ふふふ♡」

【※マークまで、すごく優しく】

それに、先生がお悩みになられた理由もわかりますよ。

【申し訳なさそうに】

私がそういう事を、すごく嫌っていると思っていたんですよ。

私、先生にたくさん心配をかけてしまいましたよね。ごめんなさい。  
でも、もう大丈夫ですよ。

私たち、両思い。なんですから。

【ぼそつと言う。恥ずかしい】

ちよつとくらいえっちな想像してくれたって構いません」 ※

〈主人公〉

「……………」

クラウドディア、改めて思う。そう、そもそも自分が全部悪いんだった。

もし自分が性にオープンな性格だったら、主人公はここまで悩む事もなかっただろう。

そんな自分には多分一生かけてもなれないが、心配をかけてしまった以上は、できる限りの事をしたい。

そう思っていると、主人公がボロボロと泣き出す。

〈主人公〉

「あつ……。ごめんね。なんかホツとしちゃって……」

デイデイは優しいんだね。わたし、怒られるんだとばかり思ってたよ。

二度と口きいてもらえないくらい、いや、それで済めば全然いい方ってくらい、めっちゃくちやに嫌われると思ってた」

クラウドディア『全体的に、どっかできいたセリフですね今の……。完全に私と先生が初めてお話した時のそれですね……。』と思う。

そうだ。あの時、主人公はまったく怒らなかった。

悪い事をしているクラウドディアを許してくれただけではなく、心配して付き添ってくれたのである。

だったら、自分が主人公を許すのはますます当然の事に思える。

こうなるために、八月二十八日、自分はあの光景を目撃したような気さえしてくる。

〈主人公〉

「でも、あの。やっぱり悪い事をしたと思っているので。」

わたしにできる事があれば何でも……」

「思わず笑ってしまう。『やっぱりそう来たか』と思っている」

はい。こういう時、先生がお詫びをしないと気が済まないたちなのは存じ上げてます。

【少し間をあけてから。さほど重要そうでもない感じで】

じゃあ、一つ聞いてもいいですか？

あの時、先生はスマホで何か見てらっしゃったと思うんですけど。  
あれはなんだったんですか？」

だが、とりあえず謎は解いておこう。後々もやもやしたくないし。

〈主人公〉

「あの！ 盗撮とかじゃないよ！」

主人公、クラウドディアの質問に慌てふためく。

しかしクラウドディアは、これによつてますます『とりあえず盗撮じゃないのは間違いないな……。ではやはり、アダルトコンテンツですかね』と確信する。

話しているうちに、主人公の顔色もさっきよりずっと良くなった。  
なので、テストも全部サボりたいくらいだけど、この話を聞いたら戻るうつと……。  
と、安心する。

「『もちろんわかってます』という感じで」

わかってますよ。先生が盗撮なんてするはずありません。  
だから、余計気になったんです」

〈主人公〉

「えつとですねえ。あの。その件なんですが……」

SE16 .. 主人公がスマホを取る音

【頭から最後まで流す】

SE17 .. 主人公がスマホを起動する音

【頭から最後まで流す】

【やや小さめの音量で流す】

しかし、ここで主人公がスマホを起動し、クラウドディアに手渡す。  
クラウドディア、青ざめる。

えっ。見せるんだこの人……変態かな？

「はい。」

【ぎよっとする】

え？ 見ていいんですか？」

〈主人公〉

「逆に、できるだけ一個一個、しっかり見てほしいんだよね。  
タイトルを読み上げてくれたってかまわないよ」

変態だった……。

クラウドディア、青ざめる。

でも、すぐに『どうしよう。えらい人につかまっちゃった。  
今からでも学校に戻ろうかな。』

藪にいた蛇をつついた感じがすごいんですけど。

見るの怖いー。引くくらいえぐいのばかりだったらどうしよう。

いや性的嗜好はその人の自由ですけど。

妄想だけにとどめているのなら、どんな事もまあだいたい許されますけど。

というか、逆に自由だからこそ、私なりにこの件そのものを黙ってようと配慮したのに。この人はなんで自分から見せようとするのかなー？

私そこまでしろなんて言っていないよね。

……でも興味ある。すごいある！

もし先生が黒ギャルとか好きだったら色々考えなきやいけないし……。ていうか、私が引きそうな内容なら、さすがに見せようとはしないか。よし、わかった。どんと来い変態』

「ちょっと引いている」

じゃあ、見ます、よ？」

〈主人公〉

「はい」



しばらく沈黙。

クラウドディア、主人公が表示させたスマホのページを見る。

そこには、とあるサイトで購入したコンテンツが一覧になっている。

つまり、ブラウザから直接各コンテンツを閲覧できるようだ。とても便利なサービスです。

そしてクラウドディアは、すぐに主人公がこれをわざわざ自分に見せようとした理由を悟る。

そこには『清楚』『お嬢様』『学園』『制服』『学生』『年下』『ロングヘア』『敬語』『巨乳』『百合』といった、自分を連想させるキーワードが並んでいたからである。

タイトルで内容がすぐにわかるのが主流の時代でよかった。

あと買ってるもの自体は、さほど変態の範疇でもない。ただの清楚系JK好きだ。

主人公はおそらく、このあたりのタグを必死に漁って買い物をしたのだろう。

それから、昔からこういう嗜好というわけでもないらしい。

購入日でわかる。一番古いのさえ一か月以内だ。少なくとも、このサイトの利用を始めたのはごく最近のようである。

そして、極めつけのキーワードはこれだ。

『水濡れ・透け』。購入日は八月下旬。なるほどね……。

先生ったら、ここまで露骨に私の事を……。ちよつと変態だけど……。

クラウディア、すべてを悟ってスマホから目を上げ、主人公を見る。

あと、いくつかのタイトルは覚えたのであとで自分でも買っておこう。後学のために。

主人公は、恥ずかしそうに、申し訳なさそうに縮こまっているくせに、何だか嬉しそうでもある。

やっぱりだいぶ変態だ。

クラウディア、そんな主人公に『これから、これまで封印していた技を使うが、そこは許してほしい』と思う。

「呆れつつもすごく嬉しい」

……先生が何をおっしゃりたいのかはわかりました。私と同じタイプの子だから、大目に見ろって事ですね？」

〈主人公〉

「そうじゃなくって。その。そのくらい、あなたが好きです……」

「もう……♡」

クラウディア『ああ、言わせちゃった。『言わせる系』は封印したテクニクだったのに。でも、これくらい、いいよね?』と思う。

恥ずかしくなってきたので、再び主人公のスマホに視線を戻す。

【わざとちよつと意地悪に】 ※わざとなのがわかる、あからさまな感じでお願いします

うわあ、これ、よく集めましたね。こういう漫画とかを見て。先生は私とあれそれする想像を補強してたんですね?

【わざとらしくため息をつく】

……はあ。

あの。前言撤回です」

〈主人公〉

「えっ」

主人公、ぎよつとして顔を上げる。

クラウディアは、それがかわいくて仕方がない。思わず笑ってしまう。今日から自分たちの関係が新しく始まるんだと思うと、わくわくする。

やっぱり手段を選ばない行動なんて、とらなくて良かった。

自分は主人公に笑っていて欲しい。それから自由でいて欲しい。

自分でいやらしい妄想をするくらいなら、全然かまわない。

それに、そんな程度の事でここまで罪悪感を抱いて、こんなにも苦しんだ主人公に対して、申し訳なくもあれば、同時にいとおしくてたまらないとも感じる。

……ていうか、だいたい同じ事、私だってするし。したし。

まあ、それをここで言おうとはしないのがね、私のずるいところなんだけど……。  
ところで……。

【かわいく怒る】

やっぱり私怒ってます。先生には罰として、もう一つお願いを聞いていただきます。

【少し間をあけてから】

今後私でえっちな妄想をしたら、それがどんなものか、絶対に私に報告する事♥

【少し間をあけてから】

だって私。先生の事もっと知りたいです。

【嬉しくてしょうがない】

今日から、先生の彼女になるんですから。ね♥」

このままフェードアウトして終了。